

三、眼鏡橋

黒岳から流れる松浦川の支流、黒尾岳川上流の上分に眼鏡橋と呼ばれる低い手すり石のついた長さ四メートル・幅二メートルのアーチ型の石橋、山川橋が架かっています。以前にはこの橋の上流に、同じ造りの上分橋と原頭橋、下流に狼ヶ鞍橋がありました。この四橋は石材を近くの黒岳にある黒岳石（角礫凝灰岩）を使い、石組みや造りが同じで地方色のある橋です。

古老からの話によると、上分橋と原頭橋は大正時代に里道の改修工事が行われた時、石工江口儀八氏によって構築された眼鏡橋です。

また、山川橋は中野原から武内村に行く往還（現県道）に架けられた橋ですが、もともと黒尾岳川を飛び石伝いに渡っていた所に架けられた橋です。明治中期に、はっきりした石工名は分かりませんが、呼び名「石切げんさん」の手で眼鏡橋が構築されました。建造工事には多数の村人が、黒岳石の切り出しや石組みなどの力仕事に、公役で働き造りあげたと聞きました。

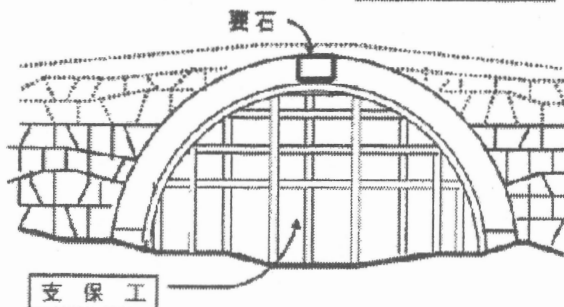
その後、長いあいだ渡っていた山川の眼鏡橋は、道路の改修工事で拡幅され県道となって路線も変更されコンクリートの新山川橋に架け替えられ用を失くなりました。通らなくなった眼鏡橋は長い間そのままのまに置かれたが、圃場整備のおり撤去する話が出ました。

しかし、眼鏡橋は石が互いに支え合い柱がないのに崩れない石組みの優れた工法の橋です。江戸時代の初め頃、寛永十一年（一六三四年）、長崎市興福寺の中国の僧「如定」が浄財を集め、中国人石工の手で、長崎の中島川に眼鏡橋を築いたのが始まりで、一七〇〇年頃までに中島川流域に数多く架けられました。



山川の眼鏡橋

眼鏡橋の工法



- ① 川の中にアーチ形に木で枠組みをして、その上に丸んだ石を木枠に沿って並べて積み、周りの石垣も同時に積み上げ、最後に要石を入れる。
- ② 枠組みをはずす。アーチ形に積んだ石が互いに支え合い崩れない。

また、その後長崎奉行配下の武士藤原林七が、眼鏡橋の原理を知るためオランダ人技術者に密かに接触して教わりましたが、見つかれば破りとして咎められ逃亡して熊本藩種山村（現東陽村）に逃れ、石工となつて工法をあみ出し石工を育てて広めたことから、熊本県や長崎県に今も大掛かりの眼鏡橋が多く残っています。有名な「通潤橋」もその一つです。

佐賀県には、県文化財指定の塩田町「八天神社の神橋」があります。数は少なく伊万里市でも各地に幾つかあったのも壊されて、今では残っているのが山川橋以外には見当たりません。地元では市の文化財扱いになればと願い出て受け入れられ遺されました。

黒尾岳川の下流の中通にも同じ造りの中島橋がありました。明治四五年の耕地整理の際、今までの木橋から架け替えられたもので、石材は牟田原の採石場の砂岩を使用したといわれています。昭和五十年代に再び圃場整備があつて道路改修にともない壊されました。

山川橋は、洪水のため構築石材が一部流失しましたが、アーチ部分の大半はそのまま残っていて堅牢さを物語っています。最近、黒尾岳川の災害復旧工事のため、県土木事務所から眼鏡橋が水を

支え河川災害の要因になっているので、撤去するようにと要請がりましたが、市文化財係の申し入れにより取り壊さないですみ現状を保っています。石造文化遺産として、きちんと保存する方法はないものでしょうか。